1980年代以降のヒュームの社会・経済思想研究

寿里里亀

この研究動向では、おもに1980年代以降のヒュームに関する英米の社会・経済思想研究を中心に概観する。この年代を選んだのは、いわゆる「富と徳」問題以降の研究動向を概観するためである。ただしこの研究動向は、筆者自身の観点から研究の流れや方向性を整理したので、最近の内外のヒューム研究書を網羅するのではない。具体的な研究動向にはいる前に、まずはテキストの整備に触れることにしよう。

I テキストの整備

テキストの問題は、直接にヒュームの社会・経済思想研究に関わるわけではないが、いかなる思想家に研究をせよ、まずは標準となるテキストの整備が重要であることは言うまでもない。その点、ヒュームのテキストの本格的な整備は、ようやく始まったばかりである。従来のヒューム研究において、1739-40年に出版された『人間本性論』(Hume 1778) と、1748年出版の『人間知性研究』および1751年出版の『道德原理研究』(Hume 1775) については、セルヴィーニービッグ版(以下、旧版という)が長く用いられてきた(旧版では『人間知性研究』と『道德原理研究』とは合本になっている)。その後、クラレンドン版の新全集の刊行が始まり、2004年現在で、その新全集版の一部として『人間知性研究』(Hume 2000 b)、『道德原理研究』(Hume 1998) がすでに出版されている。ちなみに「オックスフォード哲学シリーズ」として、同じ編者による上記の二冊がすでに出版されており、こちらのシリーズでは新刊の『人間本性論』(Hume 2000 a) も出版済みである(クラレンドン全集版の『人間本性論』は未刊)。オックスフォード哲学シリーズにせよ、クラレンドンの全集版にせよ、新版については巻・節・パラグラフ番号を引用するようになっているので、存じの問題は起こらない。問題は、旧版との照応である。新版に旧版のページ数を挿入してほしいとの要望もあるが、実現は難しいだろう。

社会・経済思想という点で言えば、1741-42年に出版された『道德政治試論集』と1752年に出版された『政治論集』をあわせた『道德・政治・文学試論集』(Essays, Moral, Political, and Literary) のテキストは、現在のところミラー版(Hume 1987) が「主流」である。それ以外にも、ホーコンセン版(Hume 1994) や、『政治論集』だけを議論の対象とするのであればロトウイン版(Rotwein 1955) 也被用されている。ミラー版の各版対象は、グリーン・グロウス版全集のそれを引き継いでおり、その中には間違いも散見される。この点、クラレンドン版の出版が待たれるところであるが、ここでも引用ページ数の照応問題が出てくることは避けられない。

次に、ヒュームの著作の翻訳状況について見ておこう。『人間本性論』の翻訳については、大槻春彦訳(『人性論』全四巻、岩波文庫、1946-52年) が代表的だったが、最近になって木曾好能訳の『人間本性論』第一巻(法政大学出版局、1995年) が出版され、木曾の選論を継いだヒューム研究者が第二・三巻の邦訳に取り組んでいる。また『人間知性研究』と『道德原理研究』については、渡部峻明訳(『人間知性の研究・概念論』哲書房、1990年、『道德原理の研究』哲書房、1993年) がすでにあるが、斎藤繁雄・いな瀬正樹訳の『人間知性研究』付・人間
本性論摘要』（法政大学出版局、2004年）を、ごく最近出版された岩波文庫版はときおり復刻されるが、事実上「入手不可」の状態にあるし、なにより訳文・活字があまりにも古い。

哲学上の主要著作の邦訳が活発なのに対し、『道德政治論集』、『政治論集』については事情が異なる。『政治論集』の完訳としては田中敏弘訳『ヒューム政治経済論集』（御茶の水書房、1983年）があるが、非常に入手困難な状況にある。両著作の抄訳としては小松茂夫訳の『市民の国について』（岩波文庫、上下巻、1952、82年）がある。小松訳はヒューム自身の親しみやすさを狙った文章を日本語でも表現しようとする点で意欲的訳と言えるが、現代ではかえって違和感を覚える部分もある。

多くの研究者が信頼して使える標準的なテキストが存在するかどうか、研究者以外の人たちがどれだけテキストにアクセスしやすいかといった問題は、研究動向全般とも決して無関係ではない。歴史・思想関連の出版事情が必ずしも良好とはいえない日本の現状を考えると、近年、ヒュームの哲学的著作の新訳が出版されていることは、ヒュームに対する関心の高まりを示すものといえる。この流れを受けて、社会思想に関わるヒュームの著作の邦訳、ときに『道德・政治論集』と『政治論集』の新訳が、できれば文庫等の形で出版されることも次第に望まれる。

原著でも翻訳でもないが、研究環境という意味で触れておかねばならないのは、ジェイムズ・フィーザーの編集する『ヒュームに対する初期の反応』シリーズ（Fieser 1999-2003）の刊行である。このシリーズの意義は、哲学、道德・政治論、宗教論、歴史論、伝記類、と幅広い範囲にわたってヒュームの著作に対する同時代の反応（とくに原著の入が困難な希少な資料）を丹念に収集しているところにある。なお、『初期アメリカにおけるヒュームに対する反応』（Spencer 2004）も最近出版され、ビーター・ジョーンズ編集による『ヨーロッパ大陸におけるヒュームに対する反応』（Jones 2005）という著作も2005年に刊行予定である。これら「反応」の資料は、ほとんどが著作からの抜粋という形をとっているので、研究資料としてはその原著全体の主張を理解した上でなければ利用できないし、すべてでない。ただし、ヒュー州の著作に対する当時の読者数を知ることができるという意味では有益である。

さて、以上はテキストや資料に関わる部分であり、以下の議論の予備作業にすぎない。以下、ヒュームの社会・経済思想に関わる諸著作をとりあげにあたって、大雑把ではあるが「理論的読解」と「歴史的読解」という二つの区分を用いることにする。1980年代以降、ヒュームの社会思想の研究動向は、思想史研究の修正主義と深く関わりつつ展開されてきたのだが、それらの研究潮流に根ざし、歴史上のヒュームを巻き出すことを無視する研究歴史的読解と呼ぶとすれば、その対極にはヒュームの著作を理論的に読解し、ヒューム思想を理論的に再構成する研究があると言える。もちろん、両者の違いはあるまでどちらを志向するか、という程度にすぎないので、研究動向の整理には有効な区分であると思われる。

II 理論的読解

哲学・道徳分野で理論的読解と言えるアプリーチを明確に採用する研究者が多いのは、ある程度までは主題の性質によるのだろう。中心にある、たとえば『ヒュームの道徳哲学における宗教と党派』の著者ハート（Herdt 1997）は、その本の冒頭で「解釈がたんなるくり返しではない以上、それはつなにある意味で構築的な試みである」と断言している。この言葉は、ここで言う理論的読解の意味をよく表している。ヒュームが生きた時代に即してヒュームの意図をさぐるというよりも、現代の研究者の側の関心から、ヒュームのテキストを読み解き、思想史家本人が明確におこなかったある種の思想の型や理論をそこに見出すという研究スタイルである。

たとえばハートの研究は、共感の限界という否定的な側面を強調することによって、ヒュームのテキストに即しつつも興味深い論点を提
出している。当然のことながら、彼女の研究の
ウェイトは、たとえば同時代の他の思想家（と
くにスミス）との関連や思想史上の影響関係よ
りも、ヒューム自身の宗教（とくに宗派）論と
の理論的関連に置かれている。
こうした理論的読解は、ヒュームの思想全般を
包括的に捉えるとする場合には、いわば不可
欠なアプローチである。学問が再分化されて
いる現代にあって、「多面的な天才」たるヒューム
の思想全体を包括的に捉えてみたい、と思う
のにはそれなりの理由があるし、それがヒューム
のもつ魅力の少なからぬ部分を占めている。
こうした意図をもつ研究として、ここでは二つ
をとりあげよう。リヴィングストンの『哲学的
憂鬱と諦妄』(Livingston 1998) は、通俗的な
立場と誤った哲学の「弁証法」として真の哲学
を位置づけ、社会理論にも同様の整理を持ち込
み、ヒュームが論じたほぼすべての領域を包括
する議論を展開している。また、ごく最近、ク
ラウディア・シュミットによる『歴史の中の理
性』(Schmidt 2003) が出版された。シュミッ
トの本もまた、哲学から政治・経済思想、宗教、
歴史にいたるまで、ヒュームの全著作を網羅し
ている。
この二つの著作は、興味深い共通点があ
る。両著作とも、いわゆる哲学から道徳、社会
科学へという、ヒュームの著述の流れを包括的
に論じるにあたって、冒頭でヘーゲルとの関連
に触れられているのである。たとえば、リヴィン
グストン本人が認めているように、彼がおこなっ
ている理論的整理は「ヘーゲル的」(Livingston
1998, 12) である。そのタイトルからしてヘーゲル的なシュミットの『歴史の中の理性』
の冒頭にも、「この研究において私はヒュー
ームがヘーゲルのように人間理性の構築的な理解を
発展させようとしていること、ヒュームがヘー
ゲルのように歴史の中に人間理性の活動を位置
づけようとしてもいることを示そうとしてい
る。ただし、これらの主題に迫る彼のスタイル
は、その後継者のスタイルとははっきりと異
なっているのだ」(p. 11) とある（たとえば
Berry 1982 はこれとは対極の立場をとる）。こ
うした共通認識は、つねに両極端を提示してそ
の両者を批判するヒューム思想の「型」が、い
わゆる「弁証法的」哲学方法論と親和的である
可能性を示している。とはいえ、それがどの
程度までヒューム思想の特質の理解として妥当
なものかは疑問である。そもそも、両極端を設
定して中庸を選ぶというだけなら、ヒュームに
限らず、スコットランド啓蒙の他の哲学者にも
（あるいはさらにそれ以外の思想家にも）適用
可能な整理であると思われる。

しかしに、ヒュームの社会・政治思想には、
一言では表現できない特徴がある。たとえば、
ヒュームはロックの抵抗権をある程度まで受容
しながら、それがどの場合に正当化されるかと
いうことになると、それは状況による、とあっ
きと答えてしまう。権威と自由の問題にして
も、権威は政治社会の基礎であり自由はその完
成である、と言えて決して一元化しようشمな
い。ある人はそれをバランス論だと言い、ある
人は複眼的思考と言うであろう、古典の自由主
義、功利主義、保守主義など、ヒュームに貼ら
れるレッテルは多岐にわたるが、このことは、
ヒュームの政治思想の特徴づけがいかに難しい
問題かということを示している。

ウィーランは『ヒュームとマキャベリー政
治のリアリズムと自由主義思想』(Whelan
2004) の中で、ヒューム政治思想のこうした捉
えがたきに取りくんている。彼は、ヒュームが
自由主義の思想家であることを認めた上で、
ヒュームとマキャベリーとの共通点をさぐりな
がら、カントやロックといった規範的な理論を
提供する契約主義的自由主義とは異質な自由主
義の流れ（ウィーランはリアリスト・リベラリ
ズムと呼ぶ）を提示しようと試みている。彼の
言うリアリズムは、理想主義的な理論化を拒絶
する態度や、現実政治を派閥や利害対立による
激しい葛藤の場とする見方、政策決定において
ときには戦略的でさえある打算を強調する姿
勢、政治的目的と手段の間に存在する矛盾に対
する鋭い感覚、などを特徴としている (p. 5)。

ウィーランはマキャベリーに対して、いわゆ
るシヴィック・ヒューマニストではなく、また
通俗的な権謀術数のマキャヴェリストでもない、政治的リアリズムの思想家という性格づけを与えており、それを通じてヒューム政治思想の特質をも明るみに出そうとしている。ただし本書には、マキャヴェリだけでなく、マキャヴェリ的な思想家としてハリントンが登場したり、ヒュームとマキャヴェリの共通の知的源泉としてリヴィウスが登場したりする。実質的に、ウィーランはここで、ヒュームとマキャヴェリにのみ共通する政治的特徴を指し出すというよりは、より広範な政治学そのものの中伝統における問題に触れてしまっているのではないか、そう考えると、それほど大きな流れに触れることは、全体の構成をやや平板という印象は免れない。冒頭でマキャヴェリとヒュームとの違いを宗教・経済・イデオのヒューマニズムの三つに整理して、その後の章は政治学（第二章）、治国策（Statecraft）（第三章）、対外政策（第四章）、ヒュームの指君主像（第五章）というトピックごとに、マキャヴェリとヒュームの共通項をめぐる考察をおこなっているものだが、異質な点と共通点をきしきに整理してしまうことで、思想史におけるダイナミズムが失われてしまっている。最終章では現代自由主義まで議論がおおんでおり、リアリズムと自由主義という着眼点はそれ自体として興味深いと言えるが、そのタイトルが与える印象とは異なり、内容は思想史というより比較思想論として分類されるべき書物である。

III 歴史的読解——「富と德」の枠組み——
こうした理論的な読解によるヒューム解釈とは一応は切り離された形で、修正主義的アプローチによるヒューム研究がおこなわれてきた。とくに、1980年代以降のヒュームの社会・経済思想の基本的な枠組みは、『スコットランド啓蒙の本質と起源』（Campbell and Skinner 1982）と『富と徳』（Hont and Ignatieff 1983b）という二冊のスコットランド啓蒙研究書の出版に、とりわけポークックによる思想史上の方法論についての変化に影響されてきた。だが、この一連の流れを整理するには、1980年代よりも少し時代をさかのぼって、フォーブスから始めてなければならない。

自然法思想の観点からヒューム思想を見るスタイルは、フォーブスの『ヒュームの哲学的政治学』（Forbes 1975）から本格化したと言える。彼の研究は、慣念や想像力といった哲学的な領域はもとより、狭い意味での道徳論、すなわち倫理学にもほとんど言及していないが、政治思想史の観点から、大陸自然法思想の伝統が近代社会における私的所有権の理説的な基礎づけとしての意味をもっていたことを示した。したがって、のちにホーコックがいうところの「言説の歴史」という方法論は、実質的にはフォーブスの業績によって先鞭をつけられていたと考えることができる。すなわち、修正主義の明確な宣言に先立つフォーブスの業績も、自然法思想という伝統の存在を掘り起こすものであったのである。

フォーブスの研究は、その後もホーコック（Haakonssen 1981）やバッブル（Bucke 1991）などに引き継がれていく一つの潮流を形成した。フォーブスが、「歴史的ウィッグ主義」の概念や「イングランド史」に関するすぐれた歴史的分析を提示したことと比べると、後者二人は、自然法思想の観点からヒューム研究を見ることで、「人間本性論」第三編や『道德原理研究』へと議論を集中させた傾向がある。だが、彼らのねらいは、むしろ近代自然法思想という大きなコンテクストへと研究の対象をシフトさせることにあった。とくにホーコックは、各思想家個別研究ではなく、その著書が示すように『自然法と道徳哲学』（Haakonssen 1996）という大きなコンテクストを描き出すことにその力に注いでいる。他方、共和主義の伝統を近代西欧思想史における「トンネル堀り」と自ら位置づけてきたポークックは、『マキャヴェリアン・モーメント』（Pocock 1975）や『徳・商業・歴史』（1985）などの論説を通じて、そのトンネルがいかに巨大なものであるかを示してきた。ポークックの業績は、日本では田中秀夫によって積極的に紹介されてきた(たとえば田中秀夫

——86——
1998 などを見よ）のだが、同時にそれは政治思想史よりも経済・社会思想史の領域における導入・反応が先行するという日本の特殊事情を生むこともなかった。

当初、ボーコックの論調は、自然法思想における法・権利の言説とは異なる言説が存在することを強調するものであったが、ウィンチ（Winch 1978）、ロバートソン（Robertson 1983）、ホント（ヒイグナティエフの共同論文 Hont and Ignatieff 1983 a）、ホーコンセナたちの関心は、単純な「あれが HERO」の議論ではなく、総体としての「富と徳」の緊張関係の中にスコットランド啓蒙や、個々の思想家を位置づけるものへとシフトしていった。

こうして概観してみると、フォーブズとボーコックらとは、ともに修正主義的な観点から自然法思想と共和主義という二つの大きな言説の存在、いわゆる「富と德」の問題設定につながる基本的な枠組みを提供してきたと言える。

当然ながら、両者の解釈の間には、多くの（たんなる相違というよりも）「ずれ」がある。フォーブズは「…ヒュームは商業的な文明化の全般的な恩恵についてはスミスよりも遥かに懐疑的でなかった」（Forbes 1975, 194）と述べているし、懐疑的ウィッグと対比させられる「通俗的ウィッグ」を、コートウィッグのみならず「コモンウェルスマン」、共和主義者、あるいは民主主義的急進主義者、トーリーさえも排除するものではなく、「コート」と「カントリー」間のあらゆる相違以上に深く横断している「ウィッグ主義」である（Forbes 1975, 183）と定義することで、ヒュームの公債論や文明の衰退認識も「通俗的ウィッグ主義の重力」（Forbes 1975, 188）に引きずられた結果である、と解釈している。

対するボーコックは「私が論じたのはこの歴史上のヒュームなのである」（Pocock 1985, 126）と言う。彼は、アメリカ独立革命期に、ヒュームが書簡の中で示したブリテン政府に対する批判的なコメントの数々を検討しているが、ヒュームが晚年になって保守化したという意見にも与せず、またフォーブズが示した近代主義者としてのヒューム像にも抗して、ヒュームの中にその時代の両義性を見出している（Pocock 1985, chap. 7）。また、共和主義との関係についても、バラダイムや言説といった概念を用いることによって、フォーブズが「通俗的ウィッグ」として一括しようとした思考の枠組みの「中」で従来の語彙の大幅な組み換えを起こした人物として、ヒュームの役割を強調することになる。

ただしこのことは、フォーブズとボーコックらがまったく異なるヒュームを見てきたことを意味するわけではない。むしろ、彼らはつねにヒュームという思想家の捉え方を含めて思索しつづけ、その姿を描き出そうとしていたのである。ボーコック自身、自らの解釈とフォーブズのそれぞれを、ともにヒュームと彼の生きた時代の両義性を捉えようとするものとみなしている。すなわち、もし私が、なぜ「反動的」および「トーリー」という言葉のどちらも、当時の政治思想一般的両義性と、またその何倍にも増幅されたヒュームの政治思想の両義性を正当に扱えるのかを考察すれば、私のテーマを押し進めることになるであろう。ジャリッツォの研究は、この両義性の研究に対する賞賛すべき貢献であった。そしてそれをフォーブズはさらに精巧にしたのである」（Pocock 1985, 127）。フォーブズもまた、ヒューム思想を「途方もない作戦行動を余儀なくされる国」（Forbes 1975, viii）と表現することができる。このことに十分に気づいていた可能性を示唆しているのである。

さて、研究上インパクトのある「枠組み」の常として、「富と徳」にはいくつかのマイナス面がともっていた。第一に、「共和主義」という用語がもっと意味内容については、現在でも研究者同士の十分なコンセンサスが確立しているとは言い難い（上述のフォーブズとボーコックのずれを見よ）。共和主義という言葉を用いる場合、各研究者が自身の定義を示すのは必要条件としても、それだけでは十分条件とまでは言えない。ある研究者は共和主義をあまりに狭く、たとえば商業批判のイデオロギーとしてだけ考
え、別の研究者は共和主義の「言説」を非常にひろく捉えた場合、両者の間で有益な共通了解がえられるとは思えない。言説という単位の難しさも加わって、「富と徳」という問題の枠組みは、かえって混乱を招いてきた側面もある。ヒューム研究とは別個に、近年の共和主義研究が展開されつつあるので、それらを十分に反映した概念上の交通整理が求められている。

この第一の点からみて、第二に、「富と徳」という切り口は、つねに二元論的な枠組みへの還元をもなっている。「富と徳」という枠組みのインパクトが大きかっただけに、思想史上の修正主義は、ともすれば「富と徳」の枠組みへの強引な還元を生む危険性をつねにはらんでいる。ヒュームに限らず、スコットランド啓蒙全般にわたって、自然法思想と共和主義以外のコンテクストをさぐる試みが、今後は求められるであろう。

IV 「富と徳」以降と経済思想研究の興隆

ボーコックから影響を受けながら、独自の思想史研究をおこなってきたロバートソンやホントらのその後の研究は、こうした素朴な二元論からは抜け出していると言える。ボーコック自身も、『野蛮と宗教』の二巻と三巻でヒュームにおけるれかえし言及しながらも、「富と徳」という問題視覚を直接には持ち出してこない3）。これはヒューム研究に限ったことではないが、「富と徳」の問題視覚を率先して提唱した研究者たち自身は、当初からその限界にも十分気づいていて、わざわざその限界を指摘するまでもなく（これ自体は必要な作業であろうが）、さらに次の段階へと進んでしまったのである。

このことは、考えてみれば当然のことでもある。修正主義的アプローチと、「富と徳」という問題の切り口は、器と中身が別であるように、本来は別個の問題である。すなわち、方法論として前者を貫くことは、むしろ後者をつねに乗り越え、新しい（歴史的には古い、あるいは現代からは容易に見えない）問題の切り口を再発見しつづけることを意味する。その意味では、一つの問題の切り口がこれだけ大きなインパクトを与えたことは、もちろんその切り口が有効だったことを示しているとしても、やや「異常」な事態だったと言うことさえ可能であろう。

こうして、ヒュームの社会思想の研究者たちは、現在「ポスト・富と徳」の段階にいてている。この段階の研究の方向性は、知性史をベースとしながらも、同時代の（やや短期的な）歴史の進展とヒューム思想の変化に強調点を置くロバートソンやホントらの研究に典型的に示されている。彼らは政治思想の側から、それぞれ国際関係論、公債論、「富国＝貧国」論争などについての詳細な議論を展開してきた。彼らの問題関心は、先にふれた「歴史上のヒューム」を探求するというボーコックの姿勢がある程度までは反映している。

たとえばホント（Hont 1993）は、ヒュームが1752年に『政治論集』の中の一節として出版した「公債について」を、次のように解釈する。ボーコックは、公債を近代的な商業のうみだす必然的な内部崩壊の要因として解釈したが、ホントはむしろ国際関係と商業という二つの関係の中でヒュームの公債論を解釈することを提案する。ホントの解釈によれば、ヒュームの公債論は、公債と商業をともに想像力や懐心にもとづく不安定なものととらえる18世紀前半の（ボーコックの言を借りれば）「ネオ・ハリトンニアンの政治経済学者」の主張とは一線を画するものである。

ロバートソンもまた、七年戦争の時期を経て、論説「勢力均衡」に示されたヒュームの国際秩序観（とくにフランス観）の変化を検討している。ここには、一つの強大な君主国が他の国々を飲み込んでしまうのではないかという「普遍的君主国（Universal Monarchy）」論とのコンテクストがあり、それに照らして当時の国際情勢やヒュームの思想の変化を明らかにしている。

こうして、彼らは『人間本性論』や『人間知性研究』、『道德原理研究』や宗教論の著作などにほとんど言及することなく、また「富と徳」という図式にとどまることなく、歴史上のヒュームをさぐる試みの一環として、様々な知
的コンテクストを背景に捉えながら同時代の政治状況とそれに対するヒューマンの対応やと注
意を向けてきた。

ここまでの研究の流れの中には、経済思想史
固有の問題を扱った研究がすでに現われてい
た。たとえば自然法思想における正義と私的所
有の問題を扱ったホントとイグナティエフの論
文（Hont and Ignatieff 1983 a）や、富国＝貧
国論争を扱ったホントの議論（Hont 1983）な
ど（とともに『富と徳』に収められている）は、
かなりの程度まで経済思想的な問題設定であ
る。だが、固有で経済思想研究者の側からおこ
なわれる研究は、すくなくとも欧米に限れば、
ロートワイン以降、活発とは言えない状況に
あった。

こうした状況は、1990 年代末ごろから変わり
始める。その変化が上に述べた政治思想史の側
からなされるヒューマン研究によって触発された
ものかどうかは定かではない。だが、ひろく社
会思想という観点で見るならば、『政治論集』を
めぐる研究が盛んになることで、その楽土は十
分に準備されていたと言えるだろう。経済思想
の側からのヒューマン研究動向の特徴は、どくに
貨幣論の分野に集中していることである。

たとえばウェナリンド（Wennerlind 2001）
は、貨幣論の分野で理論的金属主義者とされ
ていたヒューマン像に異議を唱える（理論的・実
際的金属主義という区分はシュペーベーの
『経済分析の歴史』による）。『人間本性論』第三
編でヒューマンは所有の移転について論じており
、その中で 所有権を象徴するものとして何
らかの象徴物（鍵など）が用いられるようにな
る、と説明している。ウェナリンドは、これを
貨幣論にも理論的には拡用可能な議論であると
みなして、ヒューマンは理論的には信用貨幣論者
dと主張する。ただし、ウェナリンドは単に
『人間本性論』と『政治論集』とを結び付けただ
けではない。現実の社会では、安定した紙幣信
用を発揮し利用者や機関がその当時は存在し
ていない状況を認識して、ヒューマンは「理論的
な信用貨幣論者」であり同時に「実際的な金属
主義者」と結論づけるのである。キャ
フェンティス（Caffentzis 2001）も同様に、
ヒューマンにとって貨幣はそもそもコンベン
ションの一端だから、彼は理論的な金属主
義者ではないと主張している。それでもヒュー
ムが実際的金属主義者たらざるを得なかったの
は、紙幣が安定的に使用されるには紙幣に対す
る洗練された信頼が存在しなければならないの
に、当時のスコットランド（とくにハイランド
地方）の文明が不十分だったからである。
キャフェンティスは、当時のスコットランドの
経済・文明の状況とヒューマン自身の認識を、
史料にもとづいて綿密に分析している。

シェイバス（Schabas 2001）は、国際通貨
において貨幣数量説を唱えたことで知られる
ヒューマンの説明モデルが、「水」ではなくて「電
流」ではないか、と言う。たしかにヒューマ
ンが実際に使っている言葉は「液体（fluid）」
というだけで、水と言っているわけではない、当
時の科学的な知識に照らせば「電流（electric
fluid）」という可能性もある。シェイバスは、当
時の科学実験で電流に関する研究が盛んにおこ
なわれていたことを、さらにヒューマンがそれを
十分に知りえたという状況説を積み重ねてい
く。彼女によれば、連続的影響説と呼ばれる貨
幣のもたらす生産活動への「刺激」も、ヒュー
ムが電流モデルで考えていたとすれば、より納
得のいくものになる。

実は、坂本達哉も『ヒューマンの文明社会』
(1995) において、生活様式論の観点からヒュー
ムの貨幣理論を新しく解釈していた。坂本によ
れば、連続的影響説と貨幣数量説という二つの
相容する主張が論説「貨幣について」でなされ
ているように見えるが、ヒューマンはここで貨幣
価値や商品価値の厳格な決定原理を出そうと
しているわけではない、とりとて貨幣量の政策
的・人為的な操作によって勤勉な生活様式が作
り出せるとは主張していなかった。これらはいずれも後の時代の貨幣理論というスタンス
からなされた問題設定であったが、ヒューマンは、
貨幣流入が生産を促進するには前もって勤勉な
生活様式が存在しなければならない、と主張す
ることで、貨幣の意義を制限するとともに、勤
勉な生活様式に見合った貨幣量の維持を求めたのである。坂本の議論は、もちろん貨幣理論についてのみなされたものではないが、はからずもヒュームの貨幣論研究の興薀を予見させるものであったと言える（Sakamoto 2003 も見よ）。ホントやロバートソンらの研究と対比すると、経済思想家による研究は、より理論的問題の解釈に重点がある。だが、彼らの意図もまた、経済学史上、確立されたヒュームのイメージを見直そうとしているという点では、ゆるやかな意味で修正主義の流れに踏まるものである。

こうして、強調点に若干の違いはあるものの、政治思想史と経済思想史の両側から、ヒューム経済思想研究が活発になりつつある。たとえば、上述のウェナリンドとシェイバスはヒュームの経済思想についてのアンソロジー、「ヒュームの政治経済学」（Schabas and Wenerlind 2005）を出版する計画をたてているという。このアンソロジーは、2003年に開かれたConference on Hume's Political Economyへの参加者のペーパーの中から厳選されたものを集めたものであり、2005年には出版予定のこともである。

さらに、ヒュームの経済思想研究の活性化を示す動きとしては、今年のヒューム・コンファレンスがある。これまで欧米でおこなわれていたヒューム学会の年次大会が、はじめて日本（慶應義塾大学）で開催され、そこでも上述のウェナリンドやシェイバスをはじめ、何人かの経済思想研究者がヒュームの経済思想について報告をこなした（このことは、ついて今年のコンファレンスのタイトルがヒュームの論説「技芸の洗練について」からとられた「労働、知識、人間性」であったこともよくまあであるが、基本的には哲学・倫理学者による報告が多いこのコンファレンスの中で、全体として経済思想研究者の報告が徐々に増えてつつある。

現段階では、経済思想研究者がとりあげるテーマとしては貨幣論への集中が目立つが、今後は公債論や租税論といった経済学的な個別のトピックもとりあげていくことだろう（そして、そこでも多様な知識史・歴史的コンテクストが掴み取られるだろう）。さらに、これまでとは違った形で、ヒュームの経済思想と、「人間の学」と啓蒙思想全般との関連が問われることになるだろう。これまでの修正主義的な思想研究は、理論的な関連のみが問われていた他の分野（哲学や道徳など）に属するヒューム思想とのつながりを切り離し、政治思想なら政治思想のコンテクストを重視するという方向に動いてきたのだが、このことは、今後もヒュームの経済思想と、人間の学や啓蒙思想全般との関連が問われずに済むということを意味するものではない。それらの連関がなかなか自明のものとは見なされなくなってきた現段階では、両者の関連を論じるには、より周到な議論が必要になる、ということである。こうしてみると、ヒュームの経済思想に関して、研究されるべき多くの課題が残されているのである。

V 歴史

さて、最後にヒュームの歴史論、とくに『イングランド史』の研究動向について触れておく。大きな歴史の流れの中で見てみると、18世紀から19世紀にかけては歴史家として認識されていたヒュームが、やがて哲学者として注目されるようになり（このことは同時に歴史家ヒュームという側面が大きく後退したことを意味している）、やがて社会科学者としての側面も注目されるようになってきた。ヒュームの主著の一つである『イングランド史』にふたたび研究の流れが回帰してきたのは、最近のことである。この流れにおいて、『イングランド史』についてそれなりにまとまった分析をおこなったフォーブズの研究は貴重であり、日本では大野（1977），舟橋（1985）らが、フォーブズや国制史についてのポーコックの研究を携取しながら、独自の貢献をおこなってきた。近年では政治哲学、経済思想の分野でも『イングランド史』への言及がかなり増えてきたことも、この『イングランド史』への注目を裏書きすると言えよう。

ポンパ（Pompa 1990）やベリー（Berry
1982）の著作は、いわゆる歴史哲学の分野にあたるが、それと一定区別された形で、オブライアンの『啓蒙の物語叙述』（O'Brien 1997）やポーコック『野蛮と宗教』第二巻（Pocock 1999）など、歴史叙述としての『イングランド史』を詳細に論じる著作が近年では現われ始めている（よりひろく19世紀の歴史叙述を扱ったものとしてはPhillips 2000などを見よ）。両者とも、ヒュームだけに焦点を絞っているわけではないが、19世紀以降の歴史主義や歴史哲学の展開、さらには啓蒙思想＝直線的な進歩史観という通俗的なイメージの影で、18世紀に現れたヴォルテール、ロバートソン、ヒュームによる歴史書の研究が十分におこなわれてこなかったという問題意識を共有し、当時の歴史書その自体を一つのジャンルとして扱うべきことを提案している。


以上が、さしあたって『イングランド史』に関する読解の方法ということになるが、もう一つ、国制史の展開という観点からヒュームの『イングランド史』を見る、という方法がある。もちろん、これまでの『イングランド史』研究もある程度この観点を取り入れていたのだが、これを全面的に展開して『イングランド史』を読むこととするのが、大塚元の近刊「デイヴィッド・ヒュームの政治学」である。大塚は、『道德政治試論稿』や『政治論集』を同時代史として読むというポーコックらの観点を受けて、それが『イングランド史』全体を包括しつつも統一感のある議論を展開している、日本の研究の文脈に照らしてみると、氏の著作は『イングランド史』全体を取りくんという意味では舟橋につくものであるが、ヒュームの政治学を『人間本性論』との関連ではなく、ひろい政治思想の伝統から解明しようとするという意味で、新しいヒューム政治思想研究と言える。また『富と徳』のパラダイムの問題点を指摘し、その乗り越えを明確に意図しているあたり、現代の欧米の研究レベルに照らしても、すぐれた水準のヒューム政治思想研究である（2005年のはじめに刊行予定）。

以上を概観してみると、この『イングランド史』研究もまた、大きな流れの中では一つのポスト『富と徳』の研究潮流を形成するものと言えるだろう。ここでもまた、一口に『イングランド史』の研究といっても、歴史叙述のスタイル、国制史、あるいはヒュームの人物（君主）評価など、多様な文脈での読解がおこなわれつつある。

VI む す び

今回は、『富と徳』のインパクト以降を中心に研究動向を整理してきた。論述の関係上、議論を「理論的読解」と「歴史的読解」とに分けたが、これらは方向性において異なっているというだけでなく、本来ならば協力関係にあるべきものであることを指摘しておかなければならない。歴史家は、もちろん現代的関心を完全に捨て去ることはできないとしても、あくまで同時代のコンテクストには存在しているのに現代のわれわれには見えなくなっている論点や思考の枠組みを取り出しようにする。これらの新しい発見は、歴史家のみならず、つねに理論家にも新しい読解の可能性を提示しつつかけることになる。修正主義のインパクトを経た以上、理論
アプローチを意図する研究も、ヒューマンの同時代のコンテクストを十分に検討しなければならないし、今回「理論的読解」に分類した著者も、ある程度はそれを実践しているのである。

最後に、経済思想に限らず、上記すべての分野（あるいは哲学さえも含まれるかもしれない）を通じて問題になるのは、ヒューマンの文明社会像の評価であろう。ヒューマンの経済思想が興隆した後には啓蒙思想家ヒューマンと経済思想家ヒューマンとの関連が問われたとき、どのような新しいヒューマン像が現われてくるかが注目される。このことは、ヒューマンの提示した文明社会理論や経済理論、彼が目の前にしていた文明・経済的現実との距離を問うこともなる。

たとえば、貨幣の議論をとりあげてみよう。彼が理論的には紙券信用を支持していても、現実にはそれができないとしたら、その現実は彼の文明社会像そのものに影響を与えてしまうだろう。その場合、彼が将来にはより安定した紙券信用制度が実現するはずだと考えてきた、などと断定することはできるのだろうか。また、先にあげた論文でホントはこう主張していた。商業の発展が国家間の平和的な相互依存関係を促進すれば、戦争が減り、ひいては公債のもつ危険性も少なくなるとヒューマンは考えていた。

と。だが同時に、ヒューマンは現実的にはその可能性が少ないことも認識していたとホントは言う（Hont 1993, 322）。現実性が乏しいのならば、その現実認識は彼の文明社会像に何の影響を及ぼさないのか。すくなくとも、これらは現在が理論や理想の中にいないだけだと、一蹴できる問題ではない。近年の経済思想史研究は、ヒューマンが見ていた現実の歴史を強調する傾向にある、理論と現実を区別すればそのギャップは大きくならないだろうし、その関係を問うならばヒューマンの文明社会像そのものの歴史性が問題にされざるをえない（ただし、これは歴史的制約とはかぎらない）。これらの点を突き詰めていけば、われわれが彼に負わせている啓蒙思想家というイメージそのものの大幅な見直しが必要になる可能性もある。たえず新しい解釈がうみだされていくことが、古典の古典たるゆえんであるとすれば、古典としてのヒューマン思想の価値はまだまだ失われそうにない。

注

1）本来であれば書誌情報は最後にまとめて掲載すべきところだが、ヒューマンの邦訳についてのみ、ここでは本文中に挿入したことを軽ししておく。またここで触れたもの以外にも、いくつかの翻訳が存在する。

2）シュミットの著作は、想定する読者層をヒューマンの専門家から一般の学生までとしているように、ヒューマンの専門書なのか、概説書なのかがはっきりしないという難点がある。ただしそれも研究者がこれだけ多方面にわたる近年のヒューマン研究を消化し、理論と歴史的背景についての目配りの始めた論述をしているという点では、この本は非常に有益な本である。

3）その背後にはついにマキャヴェリアン・モーメントとギボンの歴史的との関連が意識されていることは事実である（Pocock 2003, 309-10）。だが、現在も著々と刊行中の一連のギボン研究は、むしろ啓蒙の時代に『衰亡』の歴史を書かれたギボンの分析を通じて、啓蒙思想史におけるイングランド啓蒙の意義を解明することに向けられている。

4）日本の経済思想史研究は、ロートワインとフォープス両者の研究から多くの示唆を受けながらも、一つの流れを形成してきている。田中敏弘の『社会科学者としてのヒューマン―その経済思想を中心として』（田中敏弘 1971）は、より経済思想史や学史的な関心から一貫したイソツリー（勤労）論としてヒューマン経済思想を読み解くものであり、坂本達哉の『ヒューマンの文明社会―労働・知識・自由』（坂本 1995）は、イソツリー論をさらに包括する概念としての「生活様式」論を機軸にすすめることによってフォーブスの政治思想史的な視点の限界を乗り越えようとしている。「人間の学」いう問題を意識しつつ、その延長線上で文明社会論を捉えるという意味では、ロートワインに見られた哲学と社会科学との関連は、日本のヒューマン研究においてはつねに意識されてきたと言える。ただしそれは、ヒューマンの個人本性観が基本的に近代商業社会に適合なものと捉えられ、その枠組みに当てはまる限りで検討されてきたことをも意味している。この点で
は、ヒュームを基本的に近代文明社会の擁護者と見るロートワインとフォーブスに共通する見方は、日本のヒューム研究に大きな方向性を与えてきた。ただし、たとえば竹本（1990 a, b）は、考察の対象を『政治論集』のみに限定しているものの、その詳細なテキスト・クリティケや各版対照作業を通じて歴史上のヒュームを明らかにするという意味では、修正主義以降の英米の研究スタイルに近いと言え る（このことは、竹本がヒュームの「人間の学」政治経済論を一応は切り離して論じてい ることを意味する）。

5) 以上に加えて、アンソニー・プリュワーは一連 の研究（Brewer 1995–1999）でヒューム、ス チュアード、ファーガソンらの経済思想研究を 発表しつづけているが、それぞれの人物につい ての研究上層をもつ日本の経済思想史研究を踏まえるならば、ねにやや概観的という 印象を免れない。

6) これは、啓蒙思想研究と経済学史・経済思想史 との関連という問題をも含んでいる、スコット ランド啓蒙研究における同様の問題を論じた ものとして、田中秀夫（2001）を参照。

参考文献


Wennerlind, Carl. 2001. The Links between David Hume’s A Treatise of Human Nature and his Fiduciary Theory of Money. History of
Political Economy 33: 1.

犬塚 元, 2005. 『デイヴィッド・ヒュームの政治学』

東京大学出版会（近刊）。
大野精三郎, 1977. 『歴史家ヒュームとその社会哲学』一橋大学経済研究叢書 29』岩波書店。
坂本達哉, 1995. 『ヒュームの文明社会—労働・知識・自由』創文社。
田中敏弘, 1971. 『社会科学者としてのヒューム—その経済思想を中心として』未来社。
田中秀夫, 1998. 『共和主義と啓蒙—思想史の視野から』ミネルヴァ書房。
舟橋喜惠, 1985. 『ヒュームと人間の科学』勁草書房。
The Survey of Hume Studies in Political and Economic Thought since the 1980s

Ryu Susato

This survey looks at the trends in Hume studies since the 1980s. With regard to the original text and translation of Hume's writings, the new Clarendon edition of the *Essays, Moral, Political, and Literary*, and the reliable and accessible translation are expected.

The survey of recent Hume studies is divided into theoretical and historical readings.

The theoretical approach produced several interesting studies. Livingston and Schmidt proposed the Hegelian reading of Hume's overall philosophy. Although we might say there is some affinity between Hume and Hegel, the extent to which the readings of Livingston and Schmidt can be considered valid is doubtful. Whelan tried to grasp Hume's political philosophy by seeking similarities between Machiavellian Realism and Hume. His attempt aims to apprehend the elusiveness of Hume's political philosophy, but the composition of the book assumes a degree of monotony due to his emphasis on the similarities between the two thinkers.

In terms of an historical reading, the revisionism movement in the history of political philosophy has influenced and led the Hume studies since the 1980s. Within what is called “Wealth and Virtue” framework, Pocock, Robertson and Hont produced rich studies on Hume's political philosophy. However, this framework exerted too much influence upon subsequent Hume studies, so that the historically diverse realities were coerced to fit into this frame. Further, the idea of “discourse” sometimes produced confusion rather than clarity in this field.

Since the end of the 1990s, Hume studies in the history of economic thought have been on the rise, as if the recent studies in the history of political philosophy triggered them. Their discussions have concentrated on Hume's monetary theory, but the interest in this field will lead into unexplored topics hereafter. That is to say, we have now reached the “post-Wealth and Virtue” stage, and the revisionism serves to produce the recent briskness of new Hume studies in the history of economic and political thought.

Lastly, we need mention the rise in the recent years of interest in Hume's *History of England*. Recently, some scholars have shown deep interest in Hume's historical narratives. The recent increase in interest in the *History* proves that the historical studies on Hume will be followed by Hume studies in more diverse fields in the future. Along with these new studies, the problem of the relation between Hume's economic thought and his alleged appraisal of commercial society and civilization in general will need to be tackled.